

平和の炎

Vol. 7

第7回読谷村平和創造展

—— 平和郷はみんなの手で ——

読谷村全戦没者名簿



この作品は「平和の礎」デザイン・アイデアコンペにおける大賞作品です。

読 谷 村

はじめに

読谷村長 山内 徳信



来年は、あの悲惨な沖縄戦から50年を迎えます。人々の記憶からぬぐい去ることのできない惨禍。大きな犠牲を被った県民にとって、それは当然のことなのであります。しかしながら、国際的な視野に立ったとき、私たち沖縄県民も含めた日本人は加害者でもあったことを忘れてはならないと思います。

今年の第7回平和創造展では、第4回展で大きな反響を頂きました中国侵略の実相を伝える特設コーナーを再度設け、通常展示の沖縄戦での被害の状況とあわせ、被害者と加害者、双方の視点から構成してあります。展示されている一葉一葉の写真は、単に過去の日本の侵略戦争の罪禍を明らかにしているだけでなく、その事実を通して、日本人の現在の生き様と未来への選択のあり方をも、私たちに迫って来ることでしょう。

自分の国が犯した罪を忘れることは簡単ですが、はっきりと認めることは、勇気のいることです。しかしその罪の傷痕が、今なお激しくうずく人々がいる限り、私たちは罪を忘れることはできないし、なおさら忘れたふりをしてはならないと思います。最近の「従軍慰安婦」問題への対応をはじめ、過去の反省、償いなくして、国際化、国際協調、国際貢献、善隣友好といった美辞麗句は中国、朝鮮半島の人々それにアジアの人々の共感を呼ぶことはできないと思います。沖縄戦50年の節目の年を前にあえて取り組んだ次第であります。

さて、本書は沖縄県が戦後50年の記念事業として昨年11月から取り組んでおります「平和の礎」戦没者刻銘事業の読谷村における調査結果をまとめたものです。1931年9月の「満州事変」から太平洋戦争・沖縄戦終結の1945年9月までに戦争が原因で死亡した方々が対象となっており、村内調査でも多くの皆様のご協力を得てやっとここまでたどり着いた、そういっても過言ではありません。ご尽力をいただいた各位に対し感謝の意を表したいと思います。

ページをめくり、その一行一行に記された氏名を、一人ひとりの尊い命があったことを、またその後が続いたであろう人生のことを思うとき、残念で仕方がありません。各地で命のともしびを消していった多くの村民の皆様方に哀悼の意を表し、このような惨禍を二度と繰り返すことがないように心に刻みたいと思います。

最後に、本書に記された氏名、年齢、戦没地などの情報に関し、お気づきの点がございましたら、ご教示願いたいと思います。

1994年12月8日

目 次

読谷村戦没者名簿作成にあたって	1
名簿縦覧及び追加、訂正等へのご協力をお願い	2
「平和の礎(いしじ)」建設の意義及び基本理念	4
各字の戦没者名簿	
1. 喜 名	5
2. 親 志	13
3. 座喜味	15
4. 伊良皆	25
5. 上 地	31
6. 波 平	33
7. 都 屋	47
8. 高志保	49
9. 渡慶次	57
10. 儀 間	65
11. 宇 座	71
12. 瀬名波	77
13. 長 浜	81
14. 楚 辺	89
15. 渡具知	103
16. 比 謝	109
17. 大 湾	111
18. 古 堅	115
19. 大 木	119
20. 比謝江	123
21. 牧 原	127
22. 長 田	129
23. その他	131
24. 不 明	133

1 読谷村戦没者名簿作成にあたって

読谷村では読谷村史第六巻「読谷村民の戦争体験」(仮題)を編集するにあたり、昭和19年当時の読谷村の全字・全戸についての悉皆調査を行うことにしました。調査対象字は22、調査予定戸数は約3,150戸です。1989年から字単位で順次その調査を行い、字楚辺ではその調査を基に全697頁に及ぶ『楚辺誌』戦争編が編集されました。

そんな中、沖縄県では「平和の礎」に全戦没者を刻名するための戦没者調査が行われることになり、1993年10月に説明会が行われました。

(「平和の礎」の意義及び基本理念については4頁の通りです。)

読谷村史編集室では、1989年から調査を開始しましたが、1993年10月時点では約1,000戸しか終了していませんでした。全体の三分の一弱です。県の調査が戦没者名を中心に調査するのに対して、読谷村の戦災実態調査は当時の家族の氏名・生年月日・生存や戦死状況・避難状況・部落配置状況・収容所からの帰村状況など多岐にわたる調査です。その調査を進めていけば、戦没者数が出てくるということで、読谷村では独自の方法で戦災実態調査を推進することにしました。

「平和の礎」の調査が行われるということが、マスコミその他で伝えられたことにより、調査の困難さのために停滞しがちだった読谷村の戦災実態調査にはみずがつかしました。1993年12月から1994年1月にかけて多くの字で調査が開始され、3月までの短期間に千数百戸、それ以前の調査を含めると全体の8割近くが終了しました。その戦災実態調査と基礎資料等に読谷村戦没者名簿を作成しました。名簿作成までのおおよその経過は次の通りです。

基礎資料(3頁参照)から読谷関係戦没者名を資料別にパソコン入力(計3573名)

五十音順に並べ替え重複がないかどうかを確認(3573名中、明らかに重複と思われる502名を覗き3071名)

↓

沖縄県平和推進課からの資料と照合し、追加

↓

住所等を基に字別・五十音順に並べ替え

↓

戦災実態調査と照合し屋号等の確認をすると共に、新たに判明した戦没者を追加

↓

字誌や関係資料等から屋号を記入

↓

各字公民館で字別の戦没者名簿縦覧

(8月22日～8月29日)

↓

縦覧者が少なかったため、各字公民館等で字名及び屋号確認作業

↓

不明な分については、関係者へ確認

↓

字別・屋号一覧別にし、同一家族は並べるようにした

戦災実態調査は、読谷村教育委員会が、調査・作成した戦前の字ごとの戸主名・屋号等一覧と民俗地図を基に行いました。各字とも字をあげての協力態勢をとってくれたこと、戦争体験世代・戦後世代含めて字の方々が調査を行ったことが大きな原動力となり、悉皆調査を行うことができました。調査員数は215人、年齢は24歳から77歳までと幅広い年齢層の方々が協力して下さいました。字別の調査員数は3頁の通りです。

約50年前のことなので当時のことを知っている人を探し、思い出して語っていただくの

はたいへんな作業です。都市地区に比べると住民の移動が少なく、村外・県外・国外へ移動した方々についても、字の方々がその消息を知っている場合が多かったのですが、当時のことを詳しく知っている方が亡くなっていることも多く、調査困難あるいは調査不可能な所もありました。50年という歳月の重さをあらためて痛感させられました。

実際に調査にあたった方々の声を聞くと、戦争を体験していない世代は「調査はたいへんだったが、今まで知らなかったことを聞けてよかった」、戦争体験世代は「子や孫にどうしても伝えないといけなかった」となどの感想がありました。「一緒に召集された字の人の中から自分だけが生き残った。それはきっと戦争のことを語り継ぎなさいといって神様が生かしてくれたと思う」と銃弾の傷跡の残る顎をさすりながら語った70代の調査員、家族が数人も犠牲になったにも関わらず援護金がありず「今さら何を調査するのか」と調査を拒否した方、「息子が生きていれば………」と涙する90代のおばあちゃん、戦争から50年が経とうとしているのに人々の様々な思いが垣間見えました。

ある字では、悉皆調査を始める前に戦争当時のことに詳しい方数人に集まっていたいただき、栄養失調やマラリアなど直接戦闘以外で亡くなった字出身者がどれくらいいるか尋ねたところ、数名の名前が出てきました。ところが実際に各戸ごとに調査をしてみるとその数は40名に増えるという予想外の結果が出ました。戦争という極限状態、そして戦後の混乱の中で、どれほど多くの人の死が埋もれ、忘れ去られていったことが、悉皆調査の緊急性と必要性を強く感じさせられました。

2 名簿縦覧及び追加訂正等へのご協力のお願い

こうして多くの方々のご協力を得て整備した戦没者名簿は、現在の行政区順に並べ（目次参照）戦前の本籍地が他市町村の方については「その他」としました。但し、関係者が確認できた方については、その字に入れた場合もあります。また各字で確認できなかった方については「不明」としました。

以上のような経過で読谷村戦没者名簿作成を行いました。現在までの作業は戦没者の氏名・字名・屋号の確認が主で、死亡場所や死亡原因等の確認は十分ではありません。複数の資料に氏名が掲載され、死亡場所や氏名等に相違点がある場合もあります。その場合は並記し「？」をつけました。昭和19年頃の屋号一覧順に並べ、基本的には同一家族は並べて記入するよう心がけましたが、まだ十分ではありません。それらのことについてもご指摘くださいますようお願いいたします。

新聞・テレビをはじめとするマスコミや沖縄県広報等で、11月28日から12月5日まで各市町村役場で戦没者縦覧を行うということが報道されました。そのため読谷村でも、戦没者名簿縦覧に連日10名前後の方々が訪れ、中には追加申請があること、約2割の戦災実態調査がまだであることを考え合わせると、戦没者数は増えると思われます。幸い、沖縄県としても1994年12月8日に締め切った後、それ以降判明した分については、来年度以降追加刻名するという方針ですので、この戦没者名簿に無い場合はぜひ申告していただきたいと思います。

たくさんの方々のご協力でこの戦没者名簿を作成することができました。ご遺族の方や調査にご協力下さった皆様のお気持ちに応えるためにも慎重に確認作業を行い、少しでも正確な戦没者名簿を作成したいと思っています。

調査員はもとより調査にご協力して下さった皆様に心から感謝し、あわせて今後のご協力をお願いします。

18 『平和の塔再建立記念誌』(座喜味)

19 『儀間戦没者名簿』

〔字別調査員数一覧〕

〔読谷村戦没者名簿作成のための基礎資料〕

(援護関係資料等)

1 「戦没者遺族台帳」

(軍人・軍属) 字別記載

2 「戦没者遺族台帳(戦協1、2)」

(準軍属)

3 「昭和33年8月以降 戦闘参加者該当者名簿」

(準軍属)

4 「沖縄戦死亡者調査資料」

5 「対馬丸遭難死没者名簿」

6 「沖縄における一家全滅家族補償要請調査資料」

(書籍・資料等)

7 『ああ学童疎開船対馬丸』

「対馬丸遭難学童名簿」

8 『海鳴りの底から』=戦時遭難船舶の記録

(嘉義丸・湖南丸・台中丸遭難者等)

9 喜如嘉の昭和史『村と戦争』

「疎開者(避難民)死亡届受付簿」

10 『宜野座米軍野戦病院集団埋葬地集骨報告書』

「古知屋共同墓地死亡者名簿」

「福山共同墓地死亡者名簿」

11 「墓地台帳」(名護市瀬高公民館)

12 「出生死亡者名簿」(汀間市)

13 『南風の吹く日』=沖縄読谷村集団自決=

(字誌等)

14 『楚辺誌』「戦争編」

15 『残波の里』=字座誌=

16 『波平の歩み』

17 『渡慶次の歩み』

喜 名 11

親 志 2

座喜味 23

伊良皆 5

上 地 1

波 平 23

都 屋 5

高志保 12

渡慶次 7

儀 間 7

宇 座 11

瀬名波 6

長 浜 12

楚 辺 23

渡具知 28

比 謝 2

大 湾 11

古 堅 2

大 木 48

比謝江 7

牧 原 10

長 田 3

計 215

「平和の礎」建設の意義及び基本理念

去る沖縄戦で貴い命を失ったすべての人々に哀悼の意を表すとともに、悲惨な戦争の教訓を後世に正しく継承していくことは、今日に生きる我々の責務であり、使命である。

我々は、沖縄の歴史と風土の中に培われた「平和のこころ」を、あまねく広く内外にのべ伝え、世界の恒久平和の確立に寄与することを願い、沖縄戦戦没者の一人一人の氏名を刻んだ記念碑「平和の礎」を建設する。

「平和の礎」の建設に当たっては、次のことを基本理念とする。

(1) 戦没者の追悼と平和祈念

去る沖縄戦で亡くなった国内外の20万余のすべての人々に追悼の意を表し、御霊を慰めるとともに、今日、平和を享受できる幸せと平和の尊さを再確認し、世界の恒久平和を祈念する。

(2) 戦争体験の教訓の継承

沖縄戦の第2次世界大戦において、国内で唯一の地上戦の場となり、多くの貴い人命、財産を失った。このような過去の悲惨な戦争体験を風化させることなく、その教訓を後世に正しく継承していく。

(3) やすらぎと学びの場

戦没者の氏名を刻銘した記念碑のみの建設にとどめず、造形物を配し芸術性を付与し、訪れる者に平和の尊さを感じさせ、安らぎと憩いをもたらす場とする。また、子供たちに平和について関心を抱かせるような平和学習の場としての形成を目指す。

「平和の礎」建設の基本方針

「平和の礎」建設基本計画の策定に当たっては、平成4年3月にまとめられた「平和の礎」建設基本構想素案を踏まえ、次の4点を基本方針とする。

(1) 「国際平和創造の杜（仮称）構想の一環として位置づける」

「平和の礎」は、「国際平和創造の杜（仮称）」構想の一環として位置づけられていることから、同構想の理念に適合するものでなければならない。

(2) 平和祈念資料館との関連性を確保する

「平和の礎」建設の基本理念を踏まえ、平和祈念資料館との関連性が保たれるよう配慮する。

(3) 平和祈念公園内に建設する

「平和の礎」は、平和の広場として計画された平和祈念公園の環境に適合するよう、ゾーニング、エリア分け、形状等に配慮されなければならない。

(4) 本県の文化的、地域的特性を生かしたものとする

「平和の礎」は、本県の文化的、地域的特性を生かした独自性のある建造物とする。